昭和四十五年三月

佐賀県の経筒

佐賀県教育委員会

昭和四十五年三月

佐賀県の経筒

佐賀県教育委員会

発刊に当って

経塚というのは、平安時代から盛んになった末法思想の影響による一つの所産でありまして、経塚築成が最も盛んであった藤原時代から鎌倉時代にかけての信仰の一面を物語る重要な資料というべきでありましょう。

しかし、一面におきましては、平安時代から鎌倉時代にかけての工芸品が、本県には皆無にひとしい現状であるとき、この時代における工芸資料の空白を補う重要な価値をも有しているのであります。

本県内から発見された経塚の数を明らかにすることはできませんが、最近その数は次第に増加してまいりました。しかし、発見された遺物について、その所在を確認することが困難であるとともに、散逸の危険も多いことが憂慮されていたのであります。

このたび、本県内から発見された経筒をはじめとする経塚出土品を集成し、図録として刊行することにいたしました。編集担当者の労に感謝の意を表するとともに、広く資料として活用されるよう念願するものであります。

昭和四十五年三月

佐賀県教育委員会

教育長　大園　弘

目次

一、図録

1 大町町仏法堤経塚出土品……(1)
2 多久市山崎経塚出土品……(3)
3 背振山経塚出土品……(5)
4 相知町せせり谷経塚出土品……(15)
5 北方町崇判山経塚出土品……(19)
6 武雄市おつぼ山経塚出土品……(21)
7 武雄市牛の谷経塚出土品……(23)
8 塩田町塩吹経塚出土品……(25)
9 塩田町美野南経塚出土品……(27)
10 塩田町牛坂経塚出土品……(29)
11 鹿島市岩屋山経塚出土品……(31)
12 鹿島市片山経塚出土品……(33)
13 大和町真手山経塚出土品……(43)
14 唐津市鏡神社経塚出土品……(45)
15 唐津市千々賀経塚出土品……(49)
16 浜玉町座主経塚出土品……(51)

17 唐津市十二社権現出土品……(53)
18 鹿島市水梨出土品……(55)
19 塩田町下童出土品……(57)
20 誕生院所蔵の銅製経筒……(59)
21 伝東背振村琵沙門堂経塚出土品……(61)

二、補　文

1 現存しない経塚出土品……(66)
2 経塚出土と推定される遺物……(67)
3 経塚について……(68)
4 経筒について……(69)
5 県内経塚の立地……(70)
6 県内経塚の築成……(71)
あとがき……(75)

図

録

大町町仏法堤経塚

一、出　土　地　杵島郡大町町大谷口仏法堤東南部台地

二、発見の由来　昭和十年、杵島鉱業所の拡張工事中に発見されたもので、経塚の規模や構造など一切明らかでない。

三、遺物の所在地　佐賀市松原町　県文化館（大町町郷土史研究会所有）

四、形状・大きさ等

1銅製経筒

総高三〇センチメートルの鋳製、円筒式で、筒部の中央にM形の節がある。蓋は宝珠形のつまみのある笠形で、端に四孔があるが、瓔珞は欠失している。底は四個の鋲で筒部に接合されていて、平底である。

笠の高さ五センチ、径一六・九センチ、筒の高さ二五センチ、口径一二・七センチ、底は高さ〇・五センチ、径一四センチである。

2滑石製外筒

蓋欠失し、筒の高さ三七・五センチの円筒形、口径二三・五センチ、胴径二七センチ、底径二三センチで、胴部が僅かにふくらみ、整形ののみあとが数段の線となっている。

五、銘

経筒に、二段に線彫りされている。

「奉書写供養
法華如法経
嘉保三年八月廿七日
勧進僧　安増
僧　永暹
助成僧明元
同助成僧頼万
結縁僧良鎮
助成僧長与
童子延寿
鋳師僧永源
尼妙入尼善妙
助成僧良明
助成僧長融」

六、そ　の　他

経塚築成が盛んであった藤原時代の嘉保三年（一〇九六）の経塚遺物で、保存も良く、県重要文化財に指定されている。

仏法堤出土の銅製経筒

滑石製外筒

多久市山崎経塚

一、出　土　地　多久市多久町山崎八〇一六

二、発見の由来　昭和三十二年十一月十二日、密柑園造成中に山腹から発見された。

三、遺物の所在地　佐賀市松原町　県文化館（佐賀県有）

四、形状・大きさ等

1銅製経筒

総高二六・八センチメートルの鋳製、円筒式で、筒部の中央に断面が台形の節があり、筒部は緑銹に厚く被われている。蓋は、宝珠形のつまみのある笠形で、端に瓔珞を垂らすための小孔が六つあいている。底は台底で、筒部との鋲止めの孔が三孔存している。底には、草花双雀鏡が転用されている。

蓋の高さ三・五センチ、径一〇・五センチ、身の高さ二二センチ、径七センチ、底は高さ〇・八センチ、径八・二センチである。

2陶製外筒

須恵器質の甕で、高さ二九センチ、口径二〇センチ、胴径二七・五センチ、丸底で伏せて用いられていた。外側には、叩文が一面に施されている。

3瓔珞のガラス玉八五個、経筒内出土の炭化物一個。

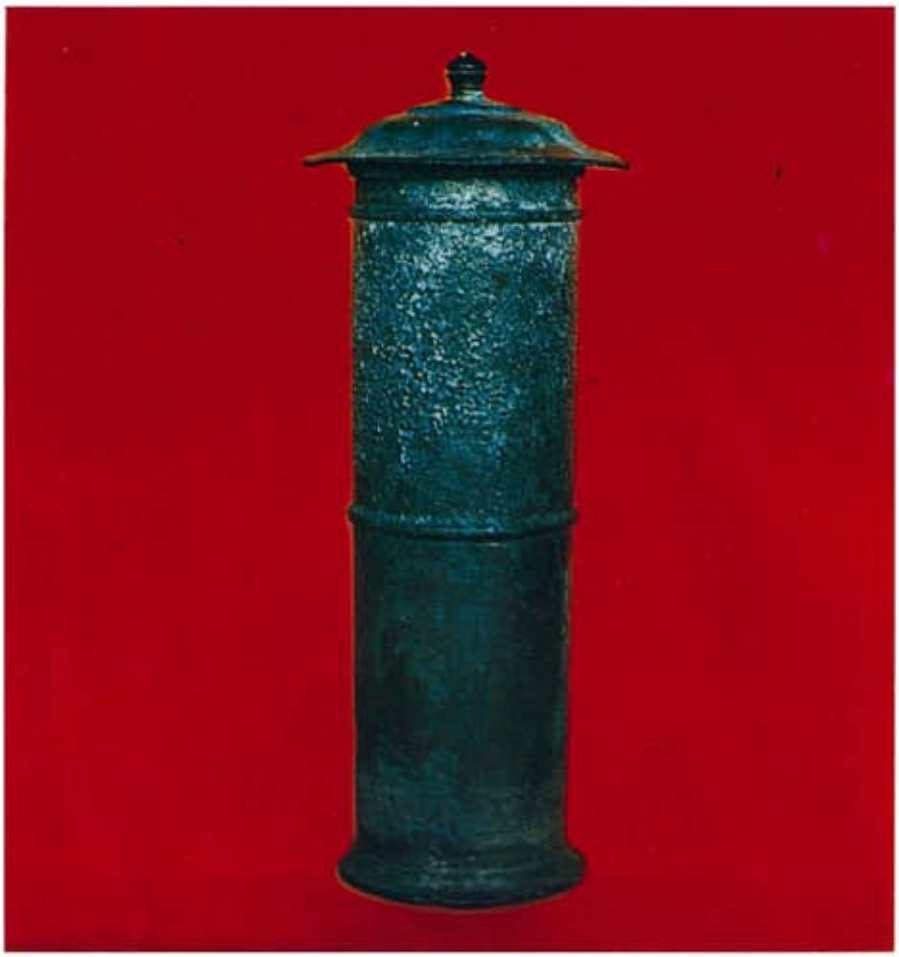
五、銘

経筒の筒部に毛彫りされている。

「天治元年十月一日　橘國末并柒嶋氏」

六、そ　の　他

経塚築成が最も盛んであった藤原時代末期の天治元年（一一二四）の銘を有し、経塚の構造が明らかであるばかりでなく、遺物が一括よく保存され、工芸品としてもその価値が高く、県重要文化財として指定されている。



山崎出土の銅製経筒

ガラス玉

草花双雀鏡

陶製外筒

背振山経塚（一）

一、出土地　肥前国背振山（詳細な場所は明らかでない）

二、発見の由来　不明

三、遺物の所在地　佐賀市城内　県立図書館（佐賀県有）

四、遺物の概要　銅製経筒四個が保有されている。極めて類似した経筒であって、すべて同年月日の銘があり、底にはすべて藤原鏡が転用されている。しかし、銘文の内容や造立年月等は同じであっても、語句には小異があり、また、蓋のつまみには宝珠形と相輪形の二種がある。

五、銘　経筒の筒部に毛彫りされているが、第一号と第二号以外は判読が困難であり、また、それぞれ銘文に小異がある。次は第一号の銘である。

「鎮西肥前州背振山　如法書写妙法蓮華経十二部内
○○○権現大行事し天尊東西満山護法聖衆
○○○為一花一礼諸大法主現世安穏後生井也
康治元年才次壬戌十一月十六日甲辰供養畢
大勧進僧僧忍　」

六、その他　藤原時代末期の康治元年（一一四二）の造立銘を有する一連の経筒として注目され、欠損か所の補修が行なわれて面目を一新している。福岡市その他に同類のものが、幾つか現存しているといわれるので、背振山にはかって相当数の経塚が築成されていたことが推定される。

背振山出土の銅製経筒

底部の鏡と銅造像

背振山経塚（二）

第一号銅製経筒

総高三五・六センチメートルの鋳製、円筒式である。

蓋は相輪形のつまみのついた笠形で、高さと径とはともに一一センチである。

筒は、高さ二三・二センチ、径七・七センチで、中央に三本、上端に二本の沈線がめぐっている。

底は台底で、高さ一・五センチ、径一〇・五センチ、草花双雀鏡が転用されている。鏡の径は、七・八センチである。

銘は、筒に毛彫りされているが、四個の経筒の中ではこの経筒の銘が一番明瞭である。

背振山出土第一号の銅製経筒

底部の草花双雀鏡

第二号銅製経筒

第一号に類似していて、総高三六センチメートルの鋳製、円筒式である。

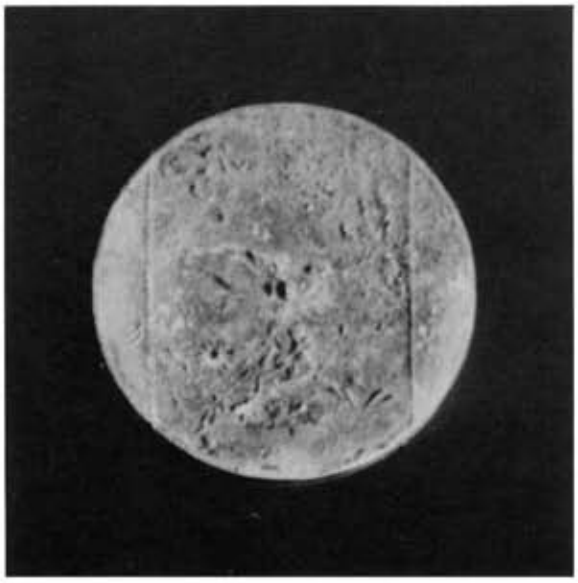
蓋は相輪形のつまみのついた笠形で、高さは一〇・七センチ、径は一一・二センチである。

筒は高さ二三・四センチ、径七・七センチで、中央に三本の沈線がめぐっている。

底は台底で、高さ一・五センチ、径一〇・五センチ、径七・一センチの鏡が転用されているが、文様は明らかでない。

筒部に毛彫りされている銘は、ほぼ同じであるが、肥前國（州）・法花経（妙法蓮華経）その他いくつかの用字や用語の違いが見うけられる。

背振山出土第二号の銅製経筒



底部の鏡

第三号銅製経筒

総高二七・五センチメートルの鋳製、円筒式である。

蓋は、第四号とともに宝珠形のつまみのついた笠形で、高さ三・六センチ、径一一・四センチである。

筒は、高さ二三・二センチ、径七・六センチで中央に二本の沈線がめぐっている。

底は、高さ〇・八センチ、径九センチの台底で、底には径七・二センチの草花双鳥文鏡が転用されている。

筒部に毛彫銘があるが、判読困難である。しかし、第一・第二号と相類似した銘文であることは、疑う余地がなく、造立年号もまた同じであると推定される。

小銅造仏

この経筒内に納められていたといわれていて、蓮台を含めての全高七・二センチメートルの合掌相の坐像で、鋳製である。

背振山出土第三号の銅製経筒

小銅造仏

草花双鳥文鏡

第四号銅製経筒

総高二七・五センチメートルの鋳製、円筒式であって、第三号に類似している。

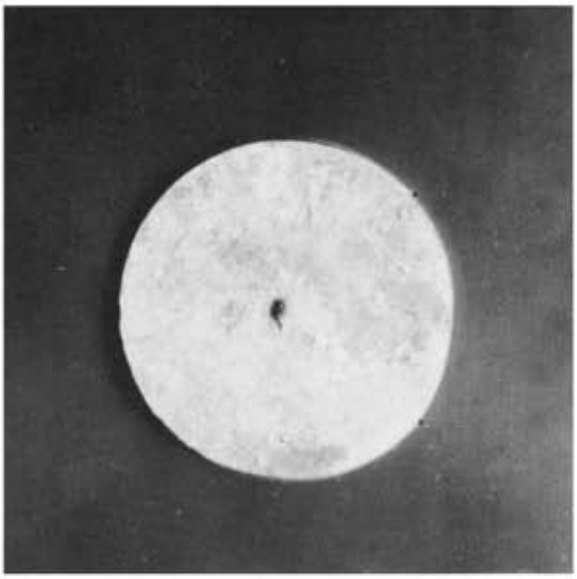
蓋は、第三号と同じく宝珠形のつまみのある笠形で、高さ三・三センチ、径一一・一センチである。

筒は、高さ二三・八センチ、径七・九センチで、中央に二本、下端に一本の沈線がめぐっている。

底は、第三号と異なり平底であって、筒の下端に底との鋲止めのあとが三か所に残っている。底には鏡が転用されているが、その文様は明らかでない。

筒部に毛彫銘があるが、判読困難である。しかし、他の三個と同年代で一連のものであることは、疑う余地がない。

背振山出土第四号の銅製経筒



底部の鏡

相知町せせり谷経塚（一）

一、出土地　東松浦郡相知町大字大野字せせり谷

二、発見の由来　昭和三十九年一月二十九日、東面している山麓の雑木林であった低丘陵地を、密柑園造成のためブルトーザーで開墾中に発見された。

三、遺物の所在地　東松浦郡相知町役場

四、形状・大きさ等

1銅製経筒

総高二五・五センチメートルの銅板鋲止めの円筒式である。蓋は、つまみのついた笠形の鋳造製で、外周は四弁の花文形を呈している。蓋の端には瓔珞を垂らしたと推定される四つの小孔があるが、瓔珞は発見されていない。筒部は、銅板を円筒形に曲げて、一〇個の銅鋲で止めている。下端は叩いて〇・五センチひろげ、一二個の銅製円鋲で底と接合しているが、各鋲の間隔や外縁からの位置などは、やや不規則である。底には、円形の銅板が用いられている。

蓋の高さ二・九センチ、径一三・二センチ、筒の高さ二二・九センチ、径九・一センチ、底は厚さ〇・一センチ、径一一センチである。

せせり谷経塚遠望（相知町提供）

滑石製外筒

出土した外筒内の経筒（相知町提供）

2滑石製外筒

円筒形で、上端付近に僅かばかり欠損部分があるほか、ほぼ完構を保っているが、蓋の部分を欠失している。筒部の高さ三七・五センチ、上端径一八・九センチ、胴部径二三・四センチ、底径二〇・一センチである。上端は、蓋受けのためほぞをつくり、上部には耳状把手が二個ついている。内外ともに整形のためののみあとがあり、内側は縦ののみあとだけであるが、外側は縦に大きく整形した後に、さらに横に小さくのみをいれている。

3経　文

天地二四・八センチ、全長三四・五センチであるが、現在四片となっている。経文は、二一センチ余りの長さにたたんで、それをさらに巻いて経筒に納入されていたと推定される。法華経八巻・観普賢経と他に一巻合せて一〇巻からなっており、界線はなく、字数も各行一定していないが、一行二八字が多い。墨と朱と両方が用いられているが、破損度が著るしい。

五、銘

経文の奥書に次のようにある。

「右始自天永三年十一月十六日、正月廿日未時書写畢」

六、その他

経塚築成が最も盛んであった藤原時代の天永三年（一一一二）の奥書を有する写経を納めた経塚出土品として注目される。とくに、在銘の経塚遺物の少ない本県にとっては、極めて貴重なものであり、また、写経の出土は本県では僅か二例が知られているにすぎないものの一つである。

せせり谷出土の銅製経筒

経文

北方町崇判山経塚

一、出　土　地　杵島郡北方町追分崇判山

二、発見の由来　大正十三、四年ごろ、今上天皇陛下の御成婚記念事業として、低丘陵の末端に位置する標高四四メートル余りの崇判山台地を開いたときに発見された。

三、遺物の所在地　杵島郡北方町北方駅前　真鍋政次郎

四、形状・大きさ等

銅製経筒

総高二七・一センチメートルの鋳製、円筒式で、筒の中央に三本、上下端に各二本からなる節がめぐっている。蓋は宝珠形のつまみのある笠形で、底は台底となっている。

蓋の高さ五・〇センチ、径一二・五センチ、筒の高さ二一・八センチ、底の高さ〇・七センチ、径一〇六センチである。

五、そ　の　他

崇判山の頂上部のほぼ中央に、松江崇判の碑が建っている。そこに経塚は築成されていたといわれ、経筒の単独出土である。

崇判山出土の銅製経筒

出土地現景

武雄市おつぼ山経塚

一、出　土　地　武雄市橘町小野原おつぼ山の北西端

二、発見の由来　昭和三十八年七月十日から開始されたおつぼ山神籠石の発掘調査の際、神籠石の列石線外至近の靭神社の石祠が奉祀されている付近から発見された。

三、遺物の所在地　武雄市武雄町　武雄市立図書館

四、形状・大きさ等

銅製経筒

総高三一・四センチメートルの鋳製、円筒式で、筒の径に比べて高さが高く細長い特徴を有している。蓋は宝珠形のつまみのある笠形で、底は台底となっている。

蓋の高さ四・六センチ、径一〇・三センチ、筒の高さ二六・六センチ、径七・二センチ、底の高さ一センチ、径九・二センチである。

五、そ　の　他

この経筒は、単独出土である。この経塚は、靭神社の石祠が奉祠されているところから出土しているが、また、この山麓至近のところに、玉泉寺という廃寺があったと伝えられている。その廃寺跡から出土した応永三十五年（一四二八）の銘のある古硯が一面、武雄市橘小学校に保管されている。銘は硯の背面に毛彫りされていて、年号と干支とが合わないし、また、廃寺の由緒も明らかでないが、この廃寺と経塚築成との間に関係があるのではないかとも考えられる。硯の背面には次のように毛彫りされている。

「肥前国龍渓海　　知全
　長嶋庄玉泉寺住持芳岩叟硯也
干時応永三十五年辰甲三月十八日」

おつぼ山出土の銅製経筒

応永年銘の硯

経塚の発見

武雄市牛の谷経塚

一、出　土　地　武雄市朝日町大字中野字牛の谷六三八五番、六三八六番

二、発見の由来　昭和二十五年八月、武雄中学校の大曲教諭指導のもとに、武雄中学校の生徒が社会科学習の一環として発掘したものである。

三、遺物の所在地　鹿島市古枝町　祐徳博物館

四、形状・大きさ等

1 銅製経筒

総高三〇・三センチメートルの鋳製、円筒式で、筒の径に比べて高さの高い細長い経筒であって、同じ武雄市のおつぼ山出土の経筒に相通ずるものがある。

蓋は、宝珠形のつまみのある笠形で、底は台底である。

蓋の高さ三・六センチ、径八・六センチ、筒は高さ二六センチ、径五・六センチ、底は高さ一・四センチ、径七・八センチである。

2 白磁盒子

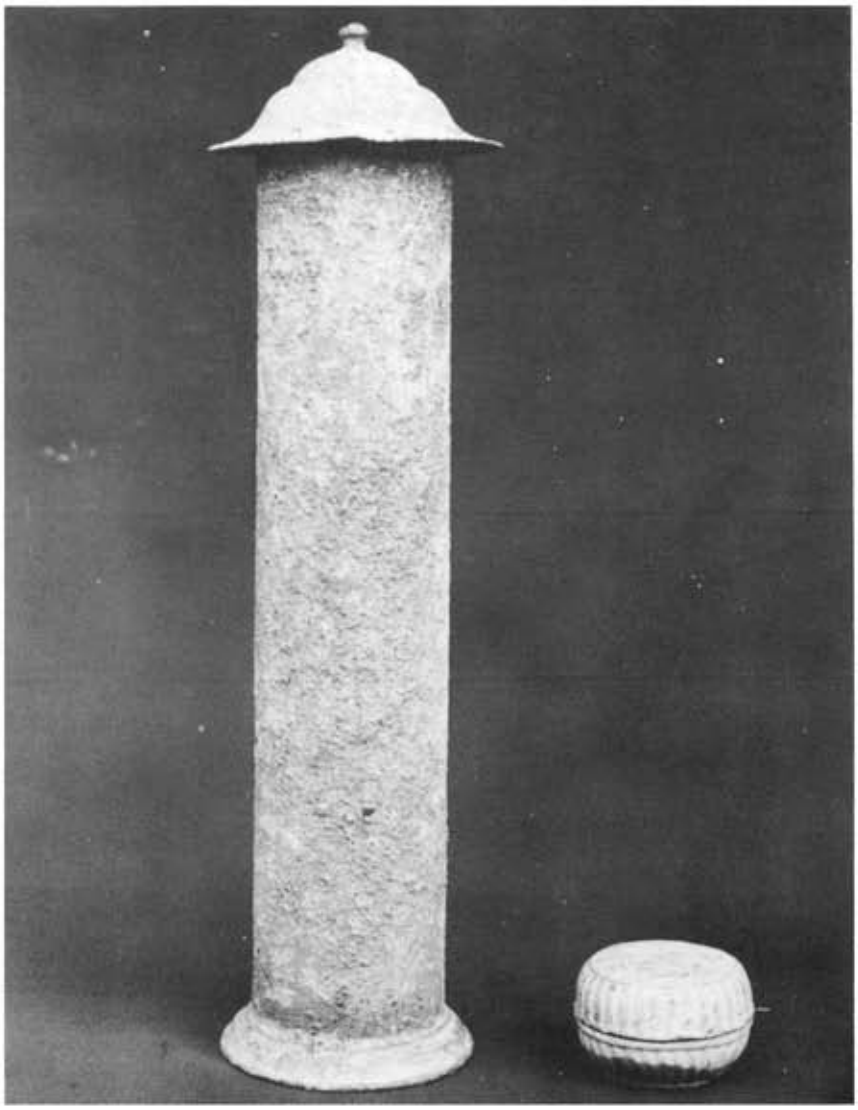
経塚内から出土したもので、高さ二・三センチ、径五・三センチ、側面に蓮弁様の刻みがあり、蓋の上面には法相華文が浮彫りされている。

3 銭　貨

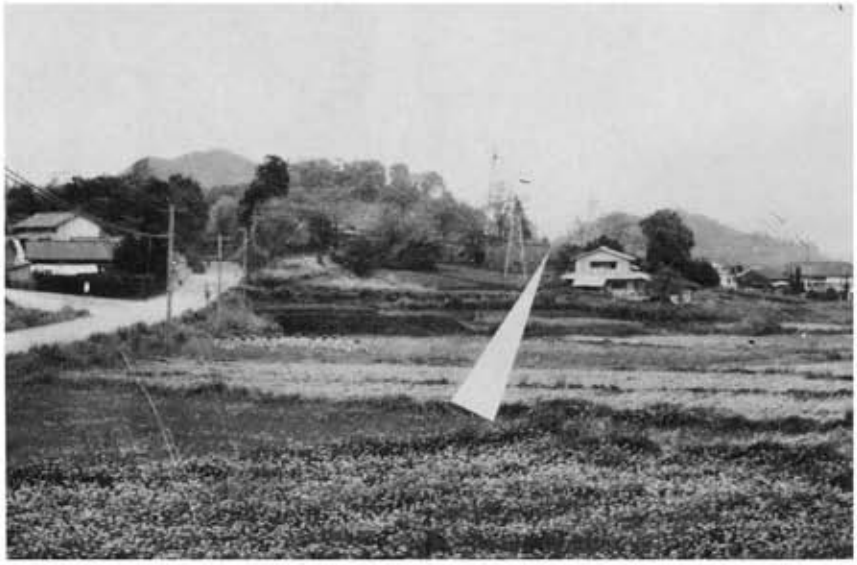
同じ経塚内から一枚出土している。欠損しているため明確ではないが、北宗の天禧通宝（一〇一七年以降）であろうと推定されている。

五、そ　の　他

銅製経筒の単独埋置であるが、経塚の奉賽物としての盒子や銭貨が発見されているのが注目される。



牛の谷出土の銅製経筒と盒子



牛の谷経塚所在地遠望

塩田町塩吹経塚

一、出　土　地　藤津郡塩田町大字馬場下字塩吹小字丸尾平一一九番地

二、発見の由来　昭和十六、七年ごろ、塩田・嬉野間の県道拡張の際の採石場から偶然に発見されたもので、経塚は県道沿いの崖上に営まれていた。

三、遺物の所在地　鹿島市古枝町　祐徳博物館

四、形状・大きさ等

1銅製経筒

総高二八・五センチメートルの鋳製、円筒式で、筒の二か所に二本づつの沈線がめぐっている。蓋は、宝珠形のつまみのある笠形で、底は台底である。

蓋は高さ二・七センチ、径一二・五センチ、筒は高さ二五・五センチ、径九・三センチ、底は高さ〇・五センチ、径一一センチである。

五、そ　の　他

経塚は、県道および塩田川に接した丘陵端の小高い台地上にあって、宝が埋まっているとの俚伝があり、その下方の水田は観音田と呼ばれている。現在、経筒のみが残っているが、発見されたとき現場にいた人の話では、外筒があったらしく、また、経文も出土したということである。しかし、それらは所在不明であり、また、経筒も相当に破損している。

塩吹出土の銅製経筒

塩吹経塚所在地遠望

塩田町美野南経塚

一、出　土　地　藤津郡塩田町美野南　通称殿屋敷

二、発見の由来　昭和三十年四月ごろ、道路工事の土取り作業中、低台地の崖端から偶然に発見された。

三、遺物の所在地　鹿島市古枝町　祐徳博物館

四、形状・大きさ等

滑石製経筒

総高三九・七センチメートルの滑石製円筒形の経筒である。蓋は、屋根形ではあるが極めて扁平であって、平面形は円形である。

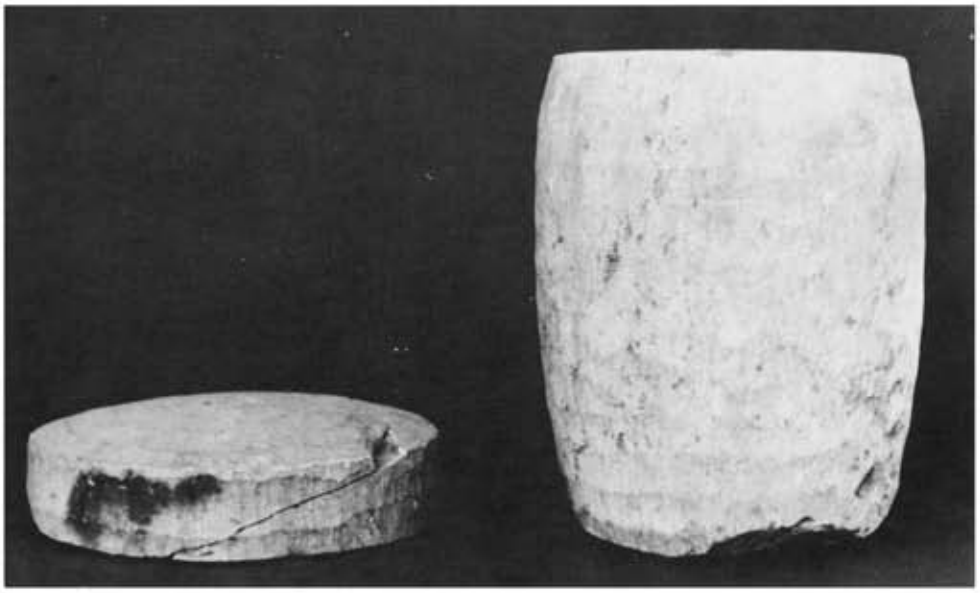
蓋の高さ八・四センチ、径二七・八センチ、筒は高さ三二・二センチ、口径二二・三センチ、胴径二四・四センチ、底径二一・四センチであって、筒は僅かばかり中央の部分がふくらんでいる。

蓋の裏面には、径二二・六センチ、深さ〇・七セシチの筒受けの穴がほりこまれており、さらに径一六・七センチ、深さ五・六センチに深く穴が掘り込まれている。筒の表面に整形ののみあとが横に通っている。

五、そ　の　他

滑石製経筒の単独埋置であって、経文は残存せず、経塚の奉賽物も発見されていない。

美野南出土の滑石製経筒



筒と蓋

塩田町牛坂経塚

一、出　土　地　藤津郡塩田町大字久間字牛坂八幡籠

二、発見の由来　牛坂八幡神社の背後の八幡籠と呼ばれている低丘陵地を、密柑園造成のため開墾していたところ、昭和三十五年五月三日に偶然この経塚を発見した。

三、遺物の所在地　鹿島市古枝町　祐徳博物館

四、形状・大きさ等

1滑石製経筒

総高三七・五センチメートルの滑石製円筒形の経筒である。蓋は、屋根形で、平面形は円形であって、円形の台石がついている。

蓋石は、高さ四センチ、径二〇センチ、筒は、高さ三三センチ、口径一六センチ、中央部の径一七・八センチ、底径一四センチで、筒は僅かばかり中央部がふくらみ、口縁部は蓋受けのために外側へむかって低くなっている。台石は、高さ一・五センチ、径一九・二センチである。

蓋の裏面には、筒受けのため深さ一・一センチ、径一七センチの内刳りが施されており、台石の表面にも深さ〇・四センチ、径一六センチの身受けがほり凹められている。

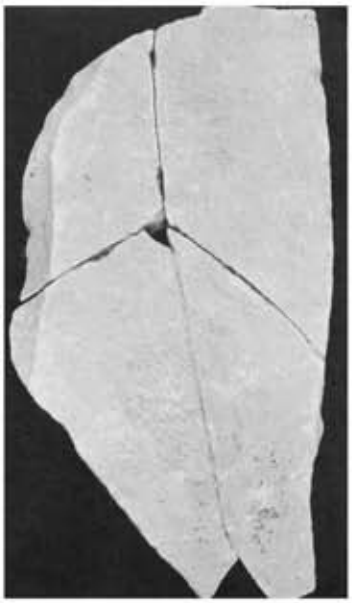
2上　石

安山岩の長さ五六センチ、幅三〇センチ、厚さ三・八～五センチの不整形の自然石であるが、この上石には「古文書」とのみで叩いた文字が大きく刻まれている。

五、そ　の　他

滑石製経筒の単独埋置ではあるが、加工した台石を用いているのは、この一例であり、また、「古文書」と刻まれた上石も注目され、付近から青磁碗が出土している。

牛坂出土の滑石製経筒



「古文書」の銘のある上石

牛坂経塚遠望

鹿島市岩屋山経塚

一、出　土　地　鹿島市能古見町筒口　岩屋観音

二、発見の由来　真言宗御室派の古寺である蓮厳院の奥の院である、奇岩と伝説に包まれた岩屋山の観音境内から大正八年七月に発見された。

三、遺物の所在地　鹿島市古枝町　祐徳博物館（鹿島誕生院有）

四、形状・大きさ等

1銅製経筒

総高二五センチメートル前後の銅板鋲止め、円筒式の経筒である。蓋は、鋳製のつまみのない笠形であって、平面形は周縁が隅丸方形で、立ち上りの部分は円形である。筒の部分は、破損著るしく、鋲の数も明らかでない。底は、銅板を用いた平底である。

蓋の高さ一・一センチ、径八・八センチ、筒は高さ不明で、径七・一センチである。

2滑石製外筒

全高三四・九センチメートルの滑石製円筒形の外筒である。蓋は、断面屋根形で、平面は隅丸方形である。蓋の裏面には、筒受けのための刳りこみがなく、平面となっている。

蓋は、高さ三・八センチ、幅二三・七センチ。筒は、高さ三一・六センチ、口径一七・八センチ、胴径二〇センチ、底径一七・二センチで、胴部が僅かにふくらみ、筒の外面は磨かれている。

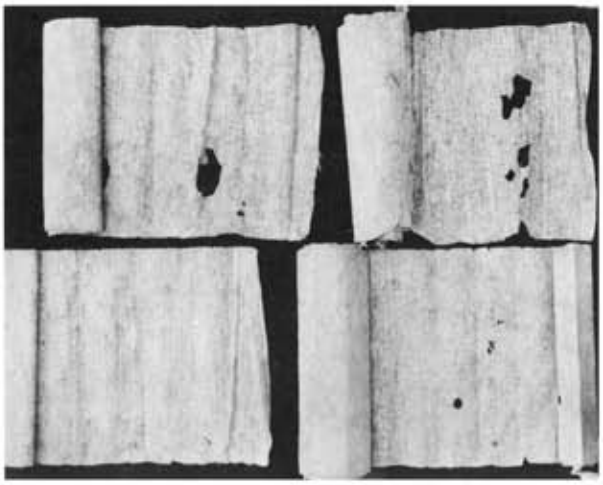
3経　文

天地二二・六センチ、全長一〇・二四センチで、相当に破損している。墨書されているが、書写年号など明らかにすることができない。

五、そ　の　他

写経が発見されている二例の中の一つとして、注目される。

岩屋山出土の銅製経筒



経文

滑石製外筒

鹿島市片山経塚（一）

一、出土地　鹿島市鹿島町若殿分片山

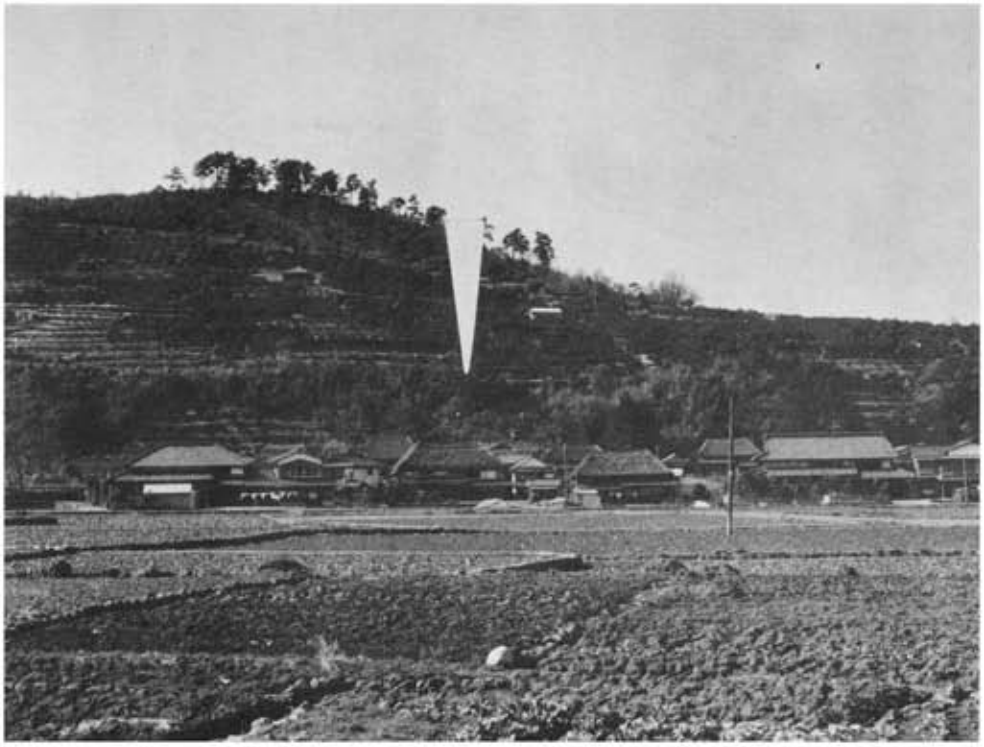
二、発見の由来　標高一八〇メートルの蟻尾山の東側山腹の樫林を切り払い、密柑園造成のための作業が行われていた昭和三十五年二月に発見された。

三、遺物の所在地　鹿島市古枝町　祐徳博物館（館有）

四、遺跡の概要　山腹の斜面に、斜面の線と直交する南北の方向にほぼ一線に四基の経塚が築成されていた。各経塚は二・四メートルの間隔をもって築かれており、径一・五メートル、高さ〇・四五メートルの石積みとなっていて、各経塚ともその構造や規模は相類似していた。遺物はこの石積みの下の遺構中に埋置されていた。

五、遺物の概要　経塚の構造は、四基ともに相類似していたが、埋置されている経筒は四基ともそれぞれ異なっていて、一号は銅製経筒に陶製外筒、二号は滑石製経筒、三号は銅製経筒、四号は銅製経筒であった。また、三号と四号には奉賽物が埋置されていたが、一号と二号にはなく、奉賽物も異なっていた。

六、その他　一連をなす四基の経塚が一定地域から発見され、確認されたのは、本県では初めての例である。しかも、遺物が確実に一括保存され、経塚の構造も明らかとなったなど、極めて重要な経塚である。ただ、この築成の年代を知るにたる資料はついに発見されなかった。



片山経塚遠望

三号経塚断面（佐々木勝氏提供）

四号経塚断面と破損経筒（佐々木勝氏提供）

第一号経塚

1 銅製経筒

総高二四・二センチメートルの銅板鋲止めの円筒式経筒である。蓋は、つまみのない笠形で、縁は一八花文形であるが、立上りの部分は円形である。筒の部分は、破損が著るしいが、六個の銅鋲で接合されている。筒部の下端をひろげて底部と接合しており、底は平底である。

蓋は高さ一・四センチ、径九・一センチ、筒は高さ二二・六センチ、径七・二センチである。

2 陶製外筒

総高二八・八センチで、筒の部分は陶製の四耳壺で、蓋は滑石製、四耳付の鉢形を呈している。この陶製壺と滑石製の蓋との結合は、県内では他に例をみない特殊なものである。

滑石製の蓋の平面形は、隅丸方形であって、側面には整形ののみあとが縦にとおり、段は横に走っている。蓋の高さ八・八センチ、縦・横ともにその口の部分の外径は一四・四センチである。

壺は、陶器であって、釉薬が全面を被っているが、胴部の釉薬は剝落しており、肩部に波形の沈線がめぐっている。壺の高さ二四・四センチ、口縁径一一・七センチ、胴径二一・九センチ、底形一一センチである。

片山第一号経塚出土の銅製経筒

外筒

外筒の壷と蓋

鹿島市片山経塚（三）

第二号経塚

滑石製経筒

総高三九・三センチメートルの滑石製の円筒形で、蓋は断面が屋根形、平面は円形である。蓋は高さ六・八センチ、径二一・八センチメートルで、裏面には、深さ二・八センチの筒受けのための円形孔がうがたれている。

筒は、高さ三四・四センチ、口径一六センチ、胴径一九・九センチ、底径一六・六センチで、胴部が僅かにふくらんでいる。筒には、整形の際ののみあとが縦に通っている。

片山第二号経塚出土の滑石製経筒

滑石製経筒の蓋

鹿島市片山経塚（四）

第三号経塚

1銅製経筒

総高三二・五センチメートルの鋳製、円筒式の経筒である。蓋は、細長い突起状のつまみのある笠形で、高さ七・一センチ、径一〇・二センチである。経筒の内部に経文は残っていなかったが、蓋に巻いたこよりの一部が不思議に残っていた。

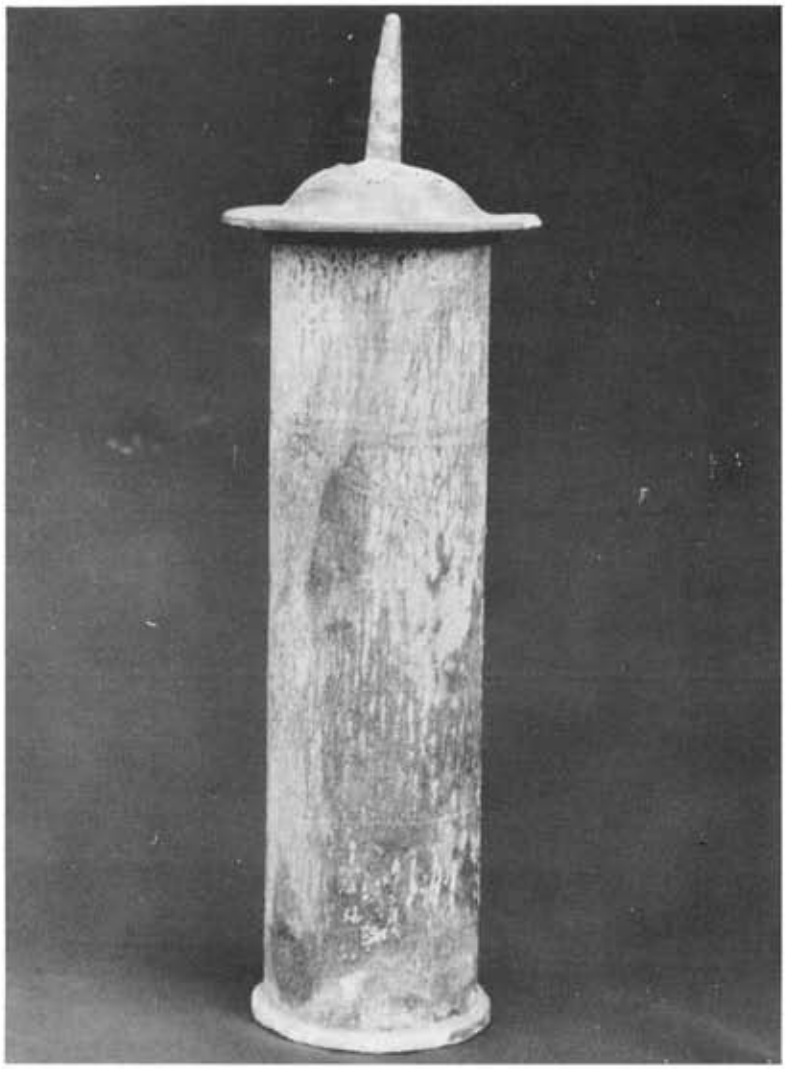
筒は、高さ二五センチ、径六・八センチであって、底は台底で高さ〇・六センチ、径七・九センチである。底には藤原鏡が転用されている。

2鉄　剣

この経塚には、鉄剣一口が奉賽物として、経筒を納めた石囲い土坑中に納入されていた。破損が著しく、剣か刀か明確ではないが剣であろうと推定される。

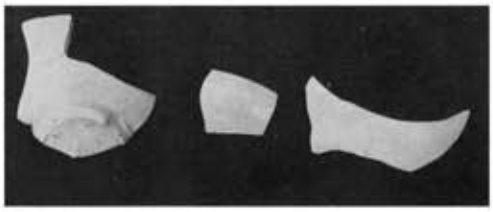
3青白磁

この経塚の積石の中から出土したもので、三個体分が発見されているが、奉賽物かどうか明確でない。



片山第三号経塚出土の銅製経筒

青白磁



鉄剣

鹿島市片山経塚（五）

第四号経塚

1陶製経筒

全高二七・八センチメートルの陶製経筒であって、筒部は須恵器質の比較的細長い壺、蓋は土師器質の坏である。この経筒は、坑内に倒れ、破損した状態で発見された。蓋の坏は、高さ二センチ、径一〇・八センチ、筒の壺は、高さ二七センチ、口径八・三センチ、胴径一五・一センチ、底径八・三センチで、上底となっている。

須恵器質と土師器質との異質のものの組合せは、隣町の太良町中峯丘陵出土の骨壺にもその例があり、この片山経塚第一号の外筒が陶製壺と滑石製蓋との異質なものの組合せになっているものにも、相通ずるところがあろうと思われる。

2鉄　刀

この経塚からは、鉄刀一口が出土しているが、著しく破損している。

片山第四号経塚出土の陶製経筒

鉄刀

陶製経筒の壷と坏

大和町真手山経塚

一、出　土　地　佐賀郡大和町大願寺真手山吉塚

二、発見の由来　明治二十二年、九州鉄道会社開設の時、吉塚で発見されたという。

三、遺物の所在地　福岡県筑紫郡太宰府町　太宰府天満宮宝物殿

四、形状・大きさ等

滑石製経筒

総高三七・二センチメートルの滑石製の円筒形経筒である。蓋は、断面が屋根形で、平面は隅丸方形、裏面には筒受けのための円形の刳り込みが施されている。蓋は、高さ五・七センチ、中央部の幅二二・三センチ、端の幅一九・八センチ、縁周りの厚さは二・一～三・五センチで、四隅の方が厚くなっている。この蓋は、典型的な四注造の屋根形であって、曲線を描く軒の反りも美しい。裏面の刳り込みは、深さ一・一～一・三センチ、径一七・八センチである。

筒は、高さ三二・六センチ、口径一六・八センチ、胴径一八・六センチ、底径一四・七センチで、下の方が少し小さくなっている。筒の表面は、よく研磨されているが、内部にはのみのあとが顕著に残っている。

五、そ　の　他

昭和三十二年八月五日、福岡県文化財に指定されている。

真手山出土の滑石製経筒

蓋

筒

唐津市鏡神社経塚（一）

一、出土地　唐津市鏡　鏡神社境内

二、発見の由来　昭和十年三月、鏡神社の神苑設置のための作業中、境内から甲・乙二基の経塚が発見された。

三、遺物の所在地　唐津市城内　唐津城展示室（鏡神社有）

四、甲経塚出土品

1銅製経筒

全高三九・四センチメートルの銅製積上式の経筒である。蓋は相輪形のつまみのある笠形で、縁周りは五弁の花文形となっている。筒は四箇の円筒を積み上げたもので、各円筒ともに六条の沈線がめぐっている。底は台底で、上底となっている。

相輪の八・四センチを加えた蓋の高さは、一二・四センチで、径は一一・四センチ、筒は高さ六・五センチの円筒四個からなっていて、積み上げた時の高さは二二・八センチ、径八・五センチである。底は、高さ六センチ、径一二・一センチである。

2陶製外筒

須恵器質の甕であって、経筒にかぶせてあったものであろうと推定される。表面には、叩きの格子文が全面に残っている。高さ四一・八センチ、口径一九・八センチ、胴径三〇・八センチ、底径一四・二センチである。

3鉄刀子

五、その他

銅製積上式の経筒は、本県内では中原村石井経塚出土の経筒とこの鏡神社のものとの二例にすぎないが、石井経塚のものは現在行方がわからなくなってしまっている。

鏡神社甲経塚出土の銅製経筒

陶製外筒

乙経塚出土品

1陶製経筒

総高二八センチメートルの陶器であって、灰釉がかかっている。蓋は埦形であって、つまみがあり、高さ六センチ、径八・八センチである。

筒は、細長い壺であって、高さ二五・一センチ、口縁部はほぼ垂直に立上っており、口径六・五センチである。肩の部分の径一二・五センチで、肩の部分が張り、底部へ向かってすぼまっている。底部は高台がついていて、径六・五センチである。

2胡州鏡　四面

四面の中、一面は円形で、他の三面は縁周が六弁の花文形となっている。径は一一センチ前後で、「胡州真正石家青銅照子」の銘がはいっているものもある。

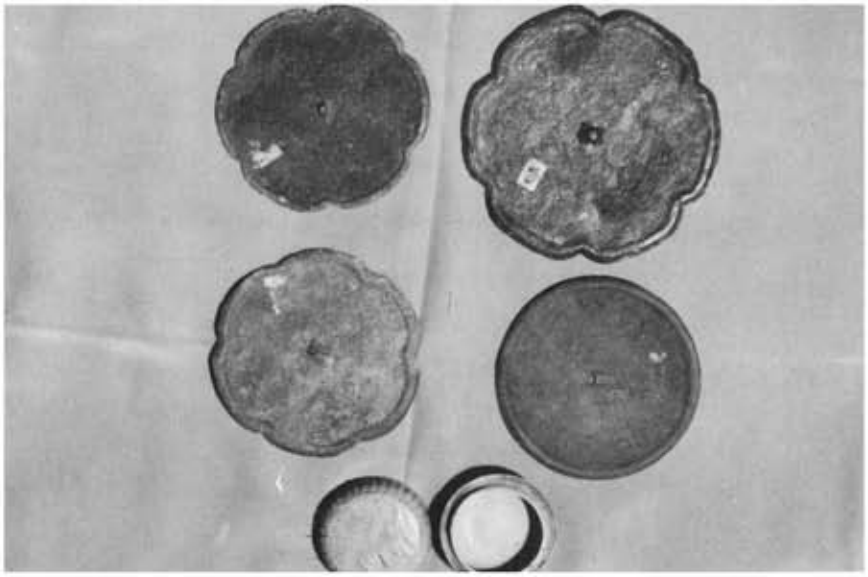
3盒子　二個

坩形のものは、高さ四・五センチ、印籠形のものは、蓋付きで総高三・五センチ、口縁部の径五・七センチである。この盒子の側面には、身・蓋ともに蓮弁状の刻文が縦にとおり、蓋の上面には花文様がある。

4その他

土師器質皿一〇個、鬼瓦片、鉄製光背などが出土している。この経塚の奉賽物は、県内経塚としては最も多彩で注目されるところである。ただ、鬼瓦片などは果して経塚の奉賽物として埋納されたものであるのかどうか、疑問に感ぜられるものも一部含まれている。

鏡神社乙経塚出土の陶製経筒



胡州鏡・盒子

唐津市千々賀経塚

一、出　土　地　唐津市鬼塚大字千々賀字寺本

二、発見の由来　この経塚が発見された年月や由来など全く不明であるが、昭和七年三月の報告書にのっているので、それ以前に発見されていることは明らかである。

三、遺物の所在地　唐津市新町　正円寺

四、形状・大きさ等

1 銅製経筒

全高二五センチメートルの銅板鋲止めの円筒式経筒である。蓋は笠形であるが、つまみは退化した突起であり、周縁は四弁の花文形を呈している。蓋の周縁には、四つの小孔があり、貝殻製の玉四個が発見されたといわれるので、瓔珞が垂らされていたと推定されるが、現在、玉は失なわれている。筒は六個の鋲で接合されており、底は平底である。

蓋は、高さ三センチ、径六・五センチ、筒は、高さ二二・九センチ、径九・五センチである。

2 滑石製外箱

本県では唯一の長方形を呈する箱形の滑石製品で、身と蓋とからなっている。蓋の裏面は、身受けのため浅く方形に刳りくぼめられ、さらに中央に経筒を受けるための円形の刳りこみがあり、その中央の小孔は外へ貫通している。身は、方形に刳りこまれているのみである。

総高三三センチメートル、蓋は高さ六センチ内外、長さは中央部で四五センチ、幅三八・五センチであり、身は高さ二九・三センチ、長さ・幅ともに蓋より小さく作られている。

3 鏡　一面

経筒の下に敷いてあったものと伝えられ、唐草に鳥の和鏡である。

千々賀出土の銅製経筒

鏡

滑石製外箱

浜玉町座主経塚

一、出　土　地　東松浦郡浜玉町平原座主

二、発見の由来　昭和三十五年十二月二十一日、座主部落の西側に当る山麓から密柑園造成中に発見された。

三、遺物の所在地　唐津市城内　唐津城展示室

四、形状・大きさ等

1銅製経筒

総高三一・二センチの鋳製、円筒式の経筒である。蓋は宝珠形のつまみのある笠形で、筒には、中央と上部にそれぞれ三本の節がめぐっている。底は、台底である。

蓋の高さは、五・四センチ、径一〇・一センチ、筒は高さ二六センチ、径六・一センチ、底は高さ〇・八センチ、径七・五センチである。

2陶製外筒

須恵器質の壺であって、丸底、表面には条痕がついている。高さ三一・三センチ、口径十六・五センチ、胴径二六・三センチである。

3鉄剣　一口

刃部の長さ一九センチ、幅一・六センチである。

座主出土の銅製経筒

鉄剣

陶製外筒

唐津市十二社権現出土品

一、この遺物は、出土の状況や出土年月など、すべて明らかでなく、経塚出土品であるかどうかも判明しない。しかし、遺物の形態からみて、経筒ではないかと推定される遺物である。

二、出　土　地　唐津市鬼塚大字千々賀十二社権現

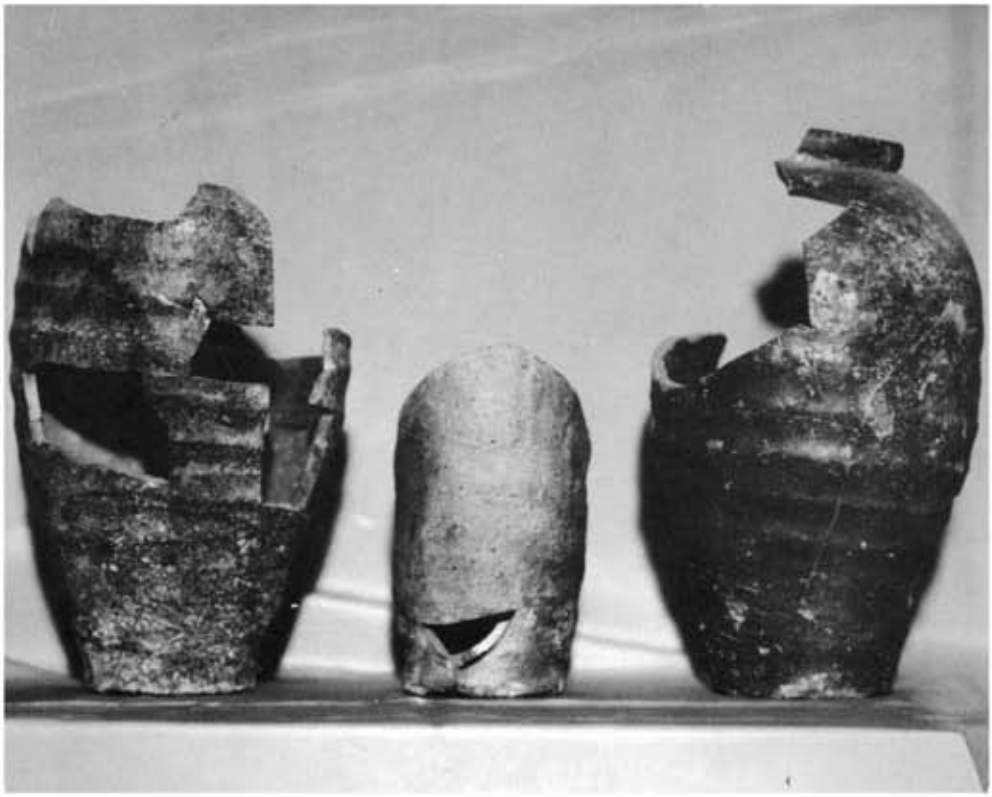
三、遺物の所在地　唐津市城内　唐津城展示室

四、遺物の形状・大きさ等

陶製壺　三個

三個ともに破損の度が著しい。大きい方の二個は、ほぼ同大であって、口縁部は垂直に立上る形式である。復原可能の一個は、高さ二二センチ、口径六・二センチ、胴部の最大径一二・八センチ、底径七センチであって鉄釉がかかっている。

小さい一個は、底部径六・三センチで平底であり、円筒形に近い形である。



十二社権現出土品

鹿島市水梨出土品

一、昭和三十五年五月、低丘陵上の畑を耕作中、山茶花の木の根元付近の土中より偶然に発見されたものである。二個の壺が重なったようにして出土したといわれ、他に共伴物は発見されず、また、近くに遺構らしいものも認められなかったという。

この二個の壺は、経塚出土であるかどうか明らかでないが、その形態からみて経筒である可能性が大きいように思われる。

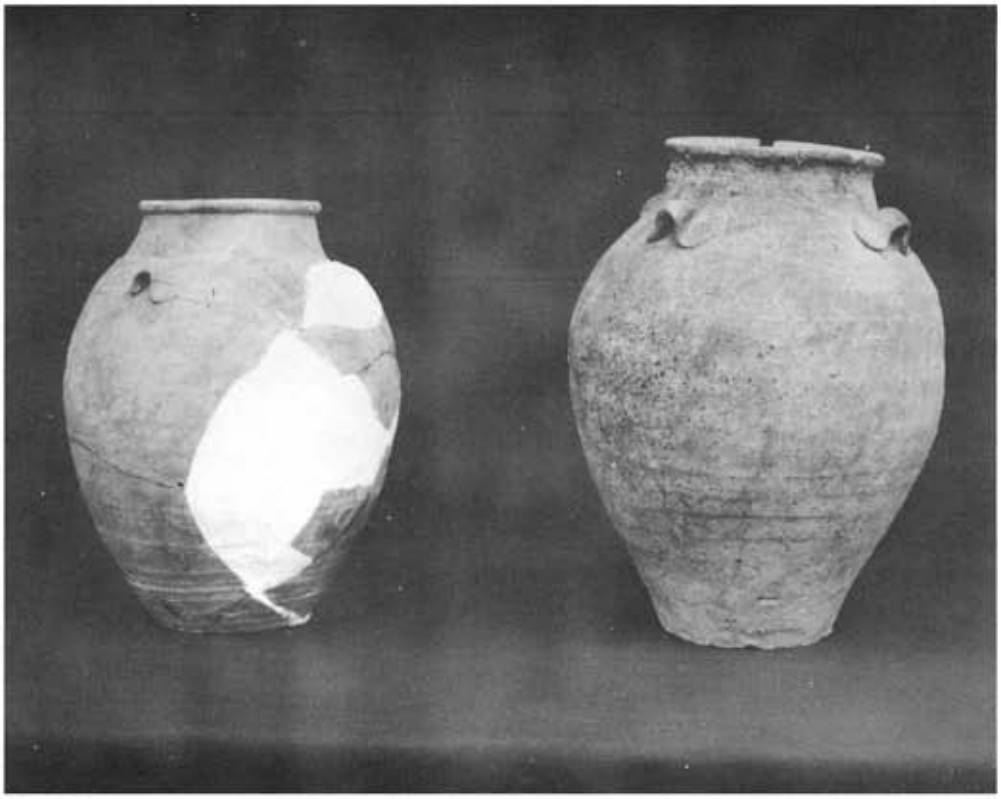
二、出　土　地　鹿島市能古見町水梨

三、遺物の所在地　鹿島市古枝町　祐徳博物館

四、遺物の形状・大きさ等

二個の壺は、大きさが少し異なり、また、大きい方は自然釉が流れているなど、やや異なっている面もあるが、形態はともに相類似し、肩にはともに四耳がついている。

大きい方は、高さ二四・五センチ、口径一〇・五センチ、最大部胴径一八・四センチ、底径八・三センチで、ほぼ完構を保っている。小さい方は、高さ二二センチで、やや形が小さく、破損の度が著しい。



水梨出土品

塩田町下童出土品

一、この出土品は、出土状況が明らかでなく、遺物もまた完全に保存されていないので、明らかでない点が多い。しかし、滑石製の円筒片や他の共伴物からみて、経塚出土品にほぼあやまりがないと考えられる。

二、出　土　地　藤津郡塩田町五町田鳥坂下童

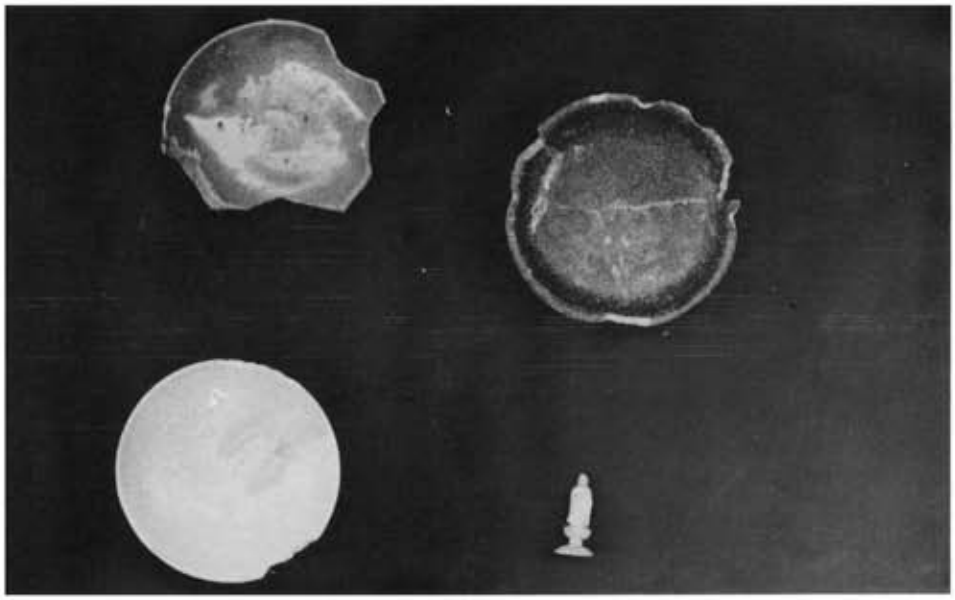
三、遺物の所在地　鹿島市古枝町　祐徳博物館

四、遺物の概要

現在保存されている遺物は、滑石製円筒片一・陶製皿三・小銅仏一である。滑石製円筒片は、口縁部近くに把手の耳がついているもので、石鍋や石釜とは異なっているところからみて、経筒とみてよかろうと考えられる。

この滑石製円筒が経筒とすれば、共伴した陶製皿や小銅仏は、奉賽物であると考えられ、銅造仏の発見はほとんど例がなく、注目される。

下童出土の滑石製円筒片



陶製皿・小銅仏

小銅仏

誕生院所蔵の銅製経筒

一、出所および入手経路も全く不明で、昭和五年に鹿島市誕生院に奉納されたものである。おそらく、本県内出土ではなかろうと考えられるが、本県内所在の唯一の室町時代の様式を有する経筒として注目される。

二、**経筒の所在地**　鹿島市古枝町　祐徳博物館（鹿島誕生院有）

三、**経筒の概要**

総高二三・三センチメートルの鋳製、円筒式の経筒である。蓋は、宝珠の下に露盤のあるつまみのついた盛蓋で、筒には種字が一字陽刻されている。底は、蓮台底であって、県内所在の他の経筒とは著しく異なった特色がみられる。

蓋は、高さ五・三センチ、径七・三センチ、筒は高さ一五・六センチ、径六・七センチ、底は高さ二・八センチ、径九・八センチである。

誕生院所蔵の銅製経筒

伝東背振村琵沙門堂経塚

一、出　土　地　神埼郡東背振村琵沙門堂付近と伝えている。

二、発見の由来　不明であって、相当以前に発見されたものであろうといわれる。

三、形状・大きさ等

滑石製経筒

塔形の珍しい滑石製経筒であって、相輪・笠・筒の三部からなっている。相輪は、高さ一五・六センチ、露盤・三輪・宝珠の造出がある。笠は、高さ六・八センチ、一辺長一九センチの方形で、下面に筒身に被せるための径一二・八センチの円形をくりこみ、上面に相輪をうける枘穴がある。

筒身は、高さ二八センチ（深さ二二・八センチ）、胴径一四・四センチ（内法一〇センチ）で、やや上すぼみとなる。胴部に細彫の刻銘がある。

筒身は内面まで入念に仕上げられ、内径が小さいことと合せて経筒自体とも考えられ、必ずしも外筒と限定する確証はない。外面の削りは上下方向に通して削られ、大形の外筒が左右方向に削られる手法と対照的である。

四、銘

「天永三年壬辰五月
如法経如理
願以書写〇仏現世无〇〇
致菩提法界　」

五、そ　の　他

天永三年は、藤原時代で、一一一二年である。この経塚遺物については、九州大学文学部考古学教室の小田富士雄氏の示教を受けたもので、同氏の「西日本の石製経筒」（日本歴史考古学論叢2、雄山閣発行）を引用した。また、写真も同氏の提供によるものである。

伝琵沙門堂出土の滑石製経筒

経筒の刻銘

補

文

一、現存しない経塚出土品

1、三養基郡中原村石井大手木経塚出土品

銅製経筒・刀子二口分・盒子二個分が出土している（佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告第二輯「石井ノ経塚」）。しかし、現在その所在が明らかでない。銅製経筒は、総高三六・四センチメートルの積上式で、筒は三段になっており、蓋は相輪形のつまみのある笠形、底は台底である。

2、神埼郡神埼町仁比山経の隈経塚出土品

仁比山神社の南方の低丘陵上に、樫森稲荷社を明治七年に勧請した時に発見されたといわれる。経筒と経巻の軸木が出土したが、再埋置したといわれ、経筒は滑石製であろうと推定されている（松尾禎作著「佐賀県考古大観続編」）。

3、伊万里市伊万里町香橘神社経塚出土品

くり抜製の経筒が出土しているといわれているが、その所在が明らかでない。（松尾禎作著「佐賀県考古大観続編」）。

4、小城郡小城町岩松岩蔵寺経塚出土品

元和七年（一六二一）に小城岩松村岩蔵の百姓によって掘り出され、藩主直能から坊城大納言に贈られ、叡覧にも供されて後、近衛殿に秘蔵されたと伝えられる銅製経箱があるという（松尾禎作著「佐賀県考古大観続編」）。この経箱については、肥前古跡縁起の岩倉天山大明神の項に、「建久年中、葉乗僧正住し給いて、如法経を講行し給う其時、曽我助成時宗の郎等鬼王駄三郎法名鬼阿弥陀駄阿弥陀仏諸国を巡て其寺に来り、如法経を聴聞して過去帖にのり御経一部銅の筒に籠て曽我兄弟助成法名十阿弥陀仏時宗五阿弥陀仏各霊頓証菩提の為と文字を彫付て即ち石堂の内に納む。」と、伝えられているものであろうと考えられる。

5、武雄市橘町小野原おつぼ山第二号経塚出土品

6、東松浦郡肥前町星賀経塚出土品

経塚は長さ一間半、幅一間、高さ四尺の小石積の上に更に礎瓦を以って長さ四尺、幅三尺、高さ不明の経室に経文若しくは仏像を埋蔵してあったようであるが、既に発掘破壊され、基底の一部を残存するのみであった。（佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告第二輯）

二、経塚出土と推定される遺物

1、杵島郡山内町船の原出土品

滑石製の器物片と滑石製の勾玉一個が出土しているが、この遺物は経塚遺物とみるのが穏当のように考えられる。しかし、本県内の経塚から滑石製勾玉が出土した例は、他になく、今後さらに検討すべきであろうと思われる。

2、神埼郡神埼町仁比山出土品

仁比山出土と伝えられる陶器の壷を、佐賀市鍋島町蛎久の田中一郎氏が保有している。全高二七センチメートルの徳利形を呈した陶器の壷であって、おそらく陶製経筒であろうと推定されるのであるが、出土状況など全く明らかでない。

三、経塚について

経典を書写し供養して、これを地中に埋納したところをいう。わが国では慈覚大師が唐より将来したと伝えられ、平安時代より江戸時代まで行なわれたが、平安時代後期が最も盛んであった。それは末法思想による仏法滅書をおそれて始まったのである。

目的の主なものは、弥勒の出世に備えて、経典をのこそうとする弥勒信仰から行なわれたものである。次には極楽往生・出離・解脱・証菩提ならびに自他の利益、現世の幸福を得るための一種の阿弥陀信仰によるものである。第三には追善供養・逆修供養を求めるものとなって、時代の降下とともに目的が純粋の仏法護持から自己本位に変わっている。

埋納すべき経塚は、寺院・神社の境内・霊地、おもに南向きの丘陵地などが選定される。埋納の方法は一定しないが、地中に高さ一メートル余り、直径一～四メートル位の小石室を作り、中に写経を納めた経筒・経箱などの容器を中心にたてて、その周辺に鏡・刀子その他の伴納物を納め、間隙には木炭・礫石などをつめ、蓋をして、上に土盛りをし、盛土の上に五輪塔・宝篋印塔などをたてることもある。

経塚の内容は、写経と容器と、付随した奉賽物とに大別できる。写経の経典の大部分は、天台宗に関係の深い法華経が多い。

写経の形式から分類すると、紙本経・瓦経・銅板経・青石経・柿経・礫石経・貝殻経などである。

経塚の奉賽物の種類は多い。大別すると、仏像・仏具・鏡・銭貨・武具・装身具などである。

中国の宋代の青白磁合子・皿の類が平安時代から鎌倉時代にかけての経塚から多数出土している。これは宋銭胡州鏡も同様であるが、当時の日宋の交通の盛んであったことを物語る。

経塚の奉賽物は、経塚経営初期の平安時代の経塚に多いのは、信仰の盛んであったことを示すが、時代が下降

して目的が利己的になると共に、内容が貧しくなり、礫石経などが多くなった。（日本考古学辞典による）

四、経筒について

経塚に埋納する紙本の写経を納める筒形の容器。経筒の最古の紀年銘あるものは、奈良県金峯山出土の藤原道長埋経、寛弘四年（一〇〇七）銘の金銅鋳造経筒である。それ以後江戸時代までである。

経筒を材料別にみると、銅製が多く、鉄・陶磁・石製などがある。銅製には銅鋳造・銅板打物があり、銅鋳造は蓋と身とを別に鋳造して合わせ、打物の身は銅板を縦矧にして鋲止めするか、鐶付けにし、底は別にはめ込む。

経筒の普通の形は円筒形で最も多い。藤原道長経筒も円筒形である。鋳銅の輪を四個位重ねて一つの円筒にした経筒は北九州特有のもので、太宰府で出土している。

宝幢形のものもあって、他に瓔珞を下げた優品もある。

経筒の蓋は、印籠蓋と被せ蓋の二方法であり、蓋の上面は平面になるもの、笠形になり、縁が花形や葉形に切れこむもの、鈕のあるもの、ないものなど種々ある。鈕は宝珠形が最も多いが、他に九輪形があり、さきの北九州の重輪式の経筒に多くつけられる。

底は鋳造に当って多くは同鋳するが、底だけ別のをはめることもある。銅板打物の場合はすべてはめ底にする。底には、平底・上げ底・台底の区別がある。在来の鏡を底板に利用したものがまれにある。

経筒の大きさは、納める経巻の高さ、巻数によって左右されるが、平安時代のものは高さ一尺位、口径六、七寸位が多く、鎌倉時代は高さが低くなる割合に口径はあまり変わらず、室町時代になると小形になって高さは三寸位、口径一寸余になるものが多い。

経筒に埋経の趣旨、願主などの銘文をつけたものが比較的に多い。筒身に陽鋳・刻鏤・針書・墨書などをほど

こすのが普通である。

経筒には外容器に納めたものがあり、多くはありあわせの素文の甕を用いる。陶製経筒には石製外容器を用いることがある。（日本考古学辞典による）

五、県内経塚の立地

1、地理的立地

大町町仏法堤経塚は東南部台地、多久市山崎経塚は南面する山腹、相知町せせり谷経塚は低丘陵に営まれた小円墳の封土上、北方町崇判山経塚は低台地の南端、おつぼ山経塚は北面する低丘陵上、塩田町塩吹経塚は南面する低丘陵の突端、鹿島市片山経塚は山腹の東南斜面に築かれていた。

大部分の経塚は、低丘陵上または山腹、あるいは丘陵端に営造されていて、低地に築かれているのはほとんど例がない。ただ、唐津市鏡神社経塚のみが例外的に山麓の低地にあるが、これは鏡神社と密接な関係を有しているものであって特例とみるべきであろう。

また、経塚の方位をみると、大部分の経塚が丘陵の南面に営まれている。武雄市おつぼ山経塚が例外的に北面に築かれているが、これはその北側山麓にあったと推定される玉泉寺廃寺との関係からであろうと考えられる。

本県内から発見された経塚を、その地勢の上からみると、低丘陵上あるいは山腹に営まれており、方位の上からしらべてみると、南面して築かれているということができる。要するに、その地理的立地は、全国的な在り方と基本的に一致しているということが可能であろう。

2、歴史的立地

神社の境内または神社の境内近くから発見されている経塚は、唐津市鏡神社経塚・唐津市十二社権現・塩田町牛坂経塚（牛坂八幡宮の背面）などである。

寺院の境内などから発見されているのは、鹿島市岩屋山経塚のみであるが、浜玉町座主経塚・大町町仏法堤経塚などは、その地名からみて寺院と関係が深いのではないかと考えられ、浜玉町座主経塚付近にはかつて殿源寺という寺があったと伝えられている。また、武雄市おつぼ山経塚は、玉泉寺廃寺との関係が考えられるし、大和町真手山経塚は大願寺廃寺または健福寺との関係を推定することができるのであって、経塚の築造と寺院とが密接な関係にあったことが知られる。

背振山経塚あるいは東背振村琵沙門堂経塚などは、神仏習合時代に栄えた背振神社や仏教道場との関係が深いことが考えられる。

経塚の歴史的立地は、神社や寺院あるいは霊山という宗教的なものを基盤としていることが考えられ、この点においても全国的な共通性がみられる。現在、宗教的な基盤が明らかでない経塚も、今後の調査によって明らかとなるものが多くなることが当然予想されるのである。

六、県内経塚の築成

1、経塚の築成年代

県内に経塚が営まれた最初の年代や最古の経塚などは明らかでない。県内出土の経塚遺物で記念銘の明らかなものを挙げてみると、次のとおりである。

嘉保三年（一〇九六）大町町仏法堤経塚

天永三年（一一一二）相知町せせり谷経塚

天永三年（一一一二）伝東背振村琵沙門堂経塚
天治元年（一一二四）多久市山崎経塚
康治元年（一一四二）背振山経塚

県内出土の経塚では、築造年代の明らかなものは、この五例にすぎず、しかも、すべて藤原時代のものであって、経塚築成が最も盛んであった時代に、本県でもやはり一番多く経塚が築成されたことを知ることができる。

県内出土で、最も古いのが、嘉保三年（一〇九六）の大町町仏法堤経塚であるが、わが国で最古の寛弘四年（一〇〇七）の藤原道長の埋経から八九年後に営まれている。

無銘の経塚出土品の中には、その形式からみて鎌倉時代に降るものもあるが、その主流は藤原時代と推定されるので、本県の経塚築成は、藤原時代にその全盛を極め、鎌倉時代まで行われていたことが知られる。しかし、その出土遺物からみて、室町時代にはほとんど行なわれなくなったのではないかと考えられる。

2、経塚の構造

おつぼ山経塚について、「経塚はすでに蓋石が露出していたので封土の状態がどのようであったか不明で、現地表面は地山となっている。

この地山を円形に掘り下げ、地表面より約六八センチメートルの深さに花崗岩平石の底がある。その底石の上に幅一二～二五センチ、長さ二一～四七センチの長形の花崗岩五個を立て、低い所は二段あるいは三段に平積みして石室を作っている。石室の中央より北寄りに経筒を安置し、周囲を木炭で充塡し、六五×八二センチ、厚さ約一七センチの花崗岩平石で蓋がなされていた。」（昭和四十年三月、佐賀県教育委員会発行「おつぼ山神籠石」）と、しるされている。

鏡神社甲経塚、「地下約五尺の所に長さ九寸幅六寸厚さ二寸の板石の上に経筒を置き、その上に素焼の甕をか

ぷせてその周囲に炭をつめ、その他には礫石等を保護した形跡はなかった。」（松尾禎作著、佐賀県考古大観）

多久市山崎経塚、「経塚は、厚さ約九〇センチメートルある表土の下に拡がっている集塊岩の岩盤を長径四六センチ、短径三九センチの楕円形に約三〇センチ掘りくぼめて、底に台石を置きその上に経筒をのせ、外筒をかぶせて、外筒の周りに木炭を充塡し、その上に約百個余りの石を堆積して構築されていたものである。」（昭和四十一年三月、佐賀県教育委員会発行「佐賀県の文化財」）

北方町崇判山経塚、「中央の二メートルばかりの所を囲んだようにして巨石が不自然に存在していたのでそれを片付けた。その所の土を少し掘り下げると自然石が多く出てきたので、更にそれを捨て去ると、砂岩質の極めて軟弱な地山があらわれた。その地山を径一メートル余り深さ四五センチ余りの円形にほりくぼめ、中に小石が一杯つめてある特殊な遺構を発見した。小石を全部取り除いてみると、中央に饅頭形に加工された石が一個すえてあった。その石を取りあげると、その下にさらに径二〇センチ、深さ六〇センチ余りの円筒形のあながほられていて、中に木炭が一杯つめてあった。その木炭をとり除くと、経筒が発見された。経筒の周囲及び上下を木炭で固められていた。」

鹿島市片山経塚、「地山を径一メートル余りに浅く掘り、その中央部をさらに径四〇センチ、深さ六〇センチ前後に深く掘り下げて底石を置き、土坑の壁面に接して石組みをほぼ方形に作って積み上げ、その内部に経筒を安置し、上部を石で覆い、その上に木炭を厚くかぶせ、拳大より大きい石を無雑作に積んで構築してある。地表上に現われている経塚の石積みは、直径一メートル半の円形で高さは四五センチ余りである。」（郷土研究第十号）

塩田町牛坂経塚、「経塚は、径七〇センチ、現地表下三五センチの深さに土坑を掘り、一二センチ×三〇センチ前後の自然石五個を土坑の内部に円形に配置して二段に積み重ね、その中央に底石を置いて、経筒を安置し、五五×三〇センチの扁平な石で蓋をして構築されていた。なお、土坑内には木炭が充塡しており、上部の構造は不明であったという。」（郷土研究第十号）

経塚は、古墳と違って、地表に現われた構造が顕著でないために、開墾等の際偶然に発見される例がそのほとんど全部であるといっても過言ではない。そのため、経塚の構造を明らかにすることは、非常に困難性を伴なっているということができる。

先に挙げた事例は、県内出土の経塚で、比較的にその構造が明らかにされているものである。これらの事例によって、経塚は地山を掘りさげ、その掘り下げた穴の中に経筒を埋置して築かれていることが知られる。その地山が軟弱であると、その穴の周囲に石囲いをなすが、北方町崇判山や多久市山崎の例のように岩盤の所を掘りくぼめると、その岩盤の穴をそのまま利用して、石囲いなどの施設は施されていない。

すべての経塚に木炭が多く用いられていて、大部分の経塚では経筒の回りに充塡されているが、鹿島市片山経塚のように、経筒の上を覆った石の上に木炭を厚くのせるという異例もみられる。

一般に経塚の上部構造、すなはち、地表面にあらわれた構造は、破壊されて明らかでない。しかし、多久市山崎経塚や鹿島市片山経塚で明らかにされているように、自然石を無雑作に推積した一種の積石塚ではなかったかと考えられる。しかし、この塚の上にさらに石塔婆などを安置してあったかどうかということは、県内の経塚では明らかにすることができない。

あとがき

一、本県内から発見された経塚の数は明らかでない。藩政時代の一字一石経を埋蔵した経塚まで加えると、相当数にのぼるのであるが、本書からは藩政時代の経塚出土品はすべて除き、平安・鎌倉・室町の各時代のもののみに限定した。

二、経塚出土品の中には、現在では所在不明のものや、再埋蔵されたものもあり、また、背振山経塚出土品のようにその出土地が不明であるばかりでなく、その一部が福岡県その他へ移動しているものなどがあって、その実数をつかむことは到底困難である。

三、本県内から銅板経は発見されていないが、瓦経については本県出土と伝えるものを所有している人がある。しかし、本県内出土かどうか確認することができない。

佐賀県の経筒

編集　佐賀県教育庁社会教育課

発行　佐賀県教育委員会

昭和四十五年三月一日　印刷
昭和四十五年三月二十日　発行

印刷所　佐賀県印刷局

佐賀市城内一―三九